

H-4

クプサビニ語の名詞の定性の区別：Dryerの定性の標識の類型論的枠組みでの分析
河内 一博

防衛大学校 先端学術推進機構 グローバル・セキュリティ・センター／総合教育学群 外国語教育室
kazuhirokawachi@gmail.com, kawachi@nda.ac.jp

発表要旨：クプサビニ語（南ナイル；ウガンダ東部）の名詞には定の接尾辞が付いた形式と付いていない形式がある。本研究は、これらの定と不定の名詞の形式が自然な会話や民話等のデータにおいてどのように使われるかを調べ、Dryer (2014) の Reference Hierarchy における適用範囲を調査して、この枠組みからわかる点、この枠組みで言語の多様性をとらえる上で考慮に入れるべきであると思われる点を指摘する。Dryerの階層の定の領域には、クプサビニ語の名詞の定の形式が使われ、不定の形式は使えない。ところが階層の不定の領域にはほとんどの場合、どちらの形式も使うことができる。実際、名詞句の指示対象が均質な成員から成る範疇を形成しているとみなされるような場合（特に指示対象が無生の場合）に階層の不定の領域に定の形式が好んで使われることが多い。不定の領域における定の形式の使用のその他の要因も報告する。

1. はじめに

1.1 本研究の目的 クプサビニ語の定と不定の名詞の形式の用法を記述し、それぞれの形式の Dryer (2014) の Reference Hierarchy における適用範囲を調べ、この枠組みからわかる点、この枠組みで言語の多様性をとらえる上で考慮に入れるべきであると思われる点を指摘する。

1.2 クプサビニ語の文法的特徴の概略 クプサビニ (Kupsapiny/Kupsabiny, /kupsapinj/ [k^hupsabij] または /kùssapinj/ [k^hùssabij]) 語 (ナイル・サハラ大語族、ナイル語族、南ナイル、カレンジン；ISO: kup) はウガンダ東部のケニアと国境にあるエルゴン山の北と西の麓のセベイで、セベイ族 (/sàpɪŋʃak/ [sàbɪŋʃak]) により話されている。セベイ族の人口はウガンダ 2014 年国勢調査によると 289,456 人で、ほぼすべての人がクプサビニ語を話す。サバオト (Sabaot) はこの言語のケニア側の方言である。他の多くのカレンジンの言語はケニアのみで話されているが、クプサビニ語（とポコット語）はウガンダとケニアで話されている。クプサビニ語の話者のほとんど（特に 60 歳代以下）はウガンダの公用語の一つである英語を第二言語として話す。特にセベイ東部ではスワヒリ語も話す人が、西部ではマサバ語 (Lumasaaba, ギス語；バントゥー JE.31) も話す人がいる。

クプサビニ語は膠着言語だが、ある程度融合を示す。接頭辞と接尾辞の両方を使い（名詞には主として接尾辞、動詞には接頭辞と接尾辞）、主要部標示が多く見られる。基本語順は VSO で、語順は比較的定まっているが、主語と目的語の名詞句のタイプの関係により、VOS も起る。前置詞を使い、名詞の後に修飾語が来る。トーン (´: high tone, `: low tone, 無表示: mid tone) による形態的格標示をし、主語に使う格と目的語に使う格のどちらが無標か、トーンだけからは判断できないが、目的語に使う格の形式がより多くの状況に使われるという点で機能的に無標であり、有標主格型 (Dixon 1994, König 2006, 2008) の形態的格標示をするとみなすことができる。

2. 先行研究

2.1 Dryer (2014) の Reference Hierarchy *World atlas of language structures (WALS)* の定冠詞・不定冠詞に関する章 (Dryer 2005a, b, 2013a, b) の調査方法を説明している Dryer (2014) は（空間的な距離の対照を示す指示詞は除いているが）定冠詞・不定冠詞を広い意味でとらえ、名詞句に起る定性を表すどのような形態統語的な形式も（通常は冠詞とは呼ばれないような接辞の定性の標識も）含めている。そして、様々な言語で定性の冠詞によってなされている区別に関するデータをもとに、(1) のような 5 つのタイプの名詞句に関する Reference Hierarchy を使い、定性の冠詞の適用範囲の類型を提案している。どの言語の定性の冠詞もこの階層の 2 つ以上のタイプの名詞句に使われる場合は、それらはこの階層において連続している。

- (1) (i) Anaphoric definites (談話での前方照応が起る定) >
- (ii) Nonanaphoric definites (談話での前方照応が起らない定：話し手と聞き手の共有知識) >
- (iii) (Semantically and) pragmatically specific indefinites (意味的・語用的に特定の不定：談話で後に指示される) (e.g. *I went to this movie last night.*) >
- (iv) Pragmatically nonspecific but semantically specific indefinites (意味的に特定のだが語用的に不特定の不定) (e.g. *I went to a movie last night.* と言った後で、その映画について何も語られない場合) >
- (v) Semantically (and pragmatically) nonspecific indefinites (意味的・語用的に不特定の不定) (e.g. *John is looking for a unicorn.*)

(i) は談話において先行する名詞句を前方照応する名詞句であるのに対し、(ii) は前方照応せず、話し手と聞き手の共有知識のみに基づいて使われる名詞句である。(iii) と (iv) は意味的に特定の (specific) で、指示対象の存在を含意するが、(v) は意味的に不特定の (non-specific) で、指示対象の存在を含意しない。(iii) は語用的に特定の、談話に新しい指示対象を取り入れ、後の談話でまたその指示対象を指すのに対し、(iv) は語用的に不特定の、後の談話で再びその指示対象を指さない。指示対象の存在を含意しない名詞句を後の談話で使うことはできるが、(v) は意味的にも語用的にも不特定のである。したがって、意味的に不特定のな名詞句は語用的にも不特定のであるということを前提としている。

Dryer (2014) によると、Reference Hierarchy は Givón (1978) が提案する Wheel と以下の点で異なる。まず Wheel と違って (i) anaphoric と (ii) nonanaphoric の 2 種類の定を区別している。また、Wheel とは異なり、総称的名詞句や叙述名詞句を含めていない。Reference Hierarchy での (iii), (iv), (v) の名詞句は Wheel での用語と以下に対応する (Givón 1978: 296 の例を挙げる)。(iii) pragmatically specific indefinite は referential indefinite (e.g. *He bought a book yesterday*) に、(iv) pragmatically nonspecific indefinite は referential non-definite (e.g. *He bought shirts/He went to the movies*) に、(v) semantically nonspecific indefinite は non-referential object (e.g. *He didn't buy any book/He's looking for a new house to buy*) (ただし (v) は目的語に限らない) に対応する。

Dryer (2005a, b, 2013a, b) の方法は定冠詞・不定冠詞の用法をもとに世界の多くの言語を分類するのには適しているが、その方法論の問題点は彼自身 (Dryer 2014) が認めているように、文法書をもとに定冠詞・不定冠詞のデータを集めているので、negative evidence (ある文脈で個々の形式が使えないということ) に関する情報が得られないので、個別言語の冠詞の厳密な使用を把握することができない。本研究ではこの問題が生じないように一つ一つの文脈における名詞の使用に関してコンサルタントに確認した。

2.2 カレンジンの言語の名詞の定性の区別に関する記述 他のナイルの言語と違い、南ナイルのカレンジンの言語は接尾辞による普通名詞の定性の区別をする。しかし、このような名詞の形式の違いについてはっきりと定性という用語を使って記述はあまりなされてこなかったようである (e.g. Towett (1979: 420–421) の Kupsigis 語の記述)。Tucker & Bryan (1966: 12, 139–142, 208–220, 456–457, 461) は、カレンジンの言語には primary の形式と secondary の形式 (primary の形式に、数により違った形式を持つ secondary の接尾辞が付いた形式) があり、これらの形式はそれぞれ不定と定として知られていると述べている。彼らによると、Pokot (Pökot/Pökoot) 語では secondary (定) の接尾辞は英語の定冠詞に相当し、Nandi 語では通常の会話で secondary (定) の形式がより普通に使われ、primary (不定) の形式が起こるのは名詞が副詞的に使われるか、とても一般的な意味に使われる場合であるということである。このような定の形式がより無標であるという記述は、Endo 語に関する Zwarts (2003: 110–110) にもある。Creider & Creider (1989: 168–169) は、Nandi 語について、secondary (定) の形式は話し手が指示対象の存在を当然と思っている場合に使われ、primary (不定) の形式は話し手がそうとは思っていない場合に使われると述べている。(別のカレンジンの Akie 語の文法である König et al. (2015: 67) は、この言語には定性の区別がないと記述していて、名詞の形式として載せているのは主にクプサビニ語の不定の形式に相当する形式のようである。)

クプサビニ語の名詞と動詞の形態を記述した Montgomery (1966: 125–154) は、定の接尾辞を paradigmatic case suffix と呼び、不定と定の形式をそれぞれ短い形式 (または thematic form) と長い形式 (または paradigmatic form) と呼んでいる。クプサビニ語の文法のスケッチである O'Brien & Cuyers (1975: 54–58) は、不定と定の形式をそれぞれ simple の形式と determined の形式と呼び、これらの違いは大雑把に英語の冠詞の the がないかあるかの違いに相当すると述べている。

3. クプサビニ語の不定と定の名詞の形式 (数と定性の名詞接尾辞を伴った名詞の形式)

クプサビニ語の普通名詞は「語幹-数-定性」という形式をとり、数 (単数/複数) と定性 (不定/定) の接尾辞の組み合わせによって、ほとんどの名詞が 4 つの形式を持つ。不定の接尾辞はゼロであることがほとんどで (まれに複数で *-(V)n*)、定の接尾辞は数によって違った形式を取る。数の接尾辞と定の接尾辞は、(2) の形式を取る (C はたいてい sonorant) (例外的な形式はいくつかある)。

- | | |
|--|---|
| (2) 単数の接尾辞: $-\emptyset, -V, -CV, -in$ | 定の接尾辞 (単数): $-ntet/-tet/-Vt/-t/-ta/-to$ |
| 複数の接尾辞: $-\emptyset, -V(V)n, -CV(V)n, -V(V)s, -Vy$ | 定の接尾辞 (複数): $-Vk/-k$ (まれに $-uut$) |

単数の形式が形態的に無標である名詞と、複数の形式が形態的に無標である名詞がある (Hieda 2006, 稗田 2006) が、単数の形式と複数の形式のどちらが形態的に無標か決め難い名詞や、形式が補充的 (suppletive) で分析が困難な名詞が多くある。表 1 に 4 つの形式の例を (A) 単数・不定、(B) 単数・定、(C) 複数・不定、(D) 複数・定の順で挙げる。

表 1: クプサビニ語の名詞の不定と定の形式の例

無標性	意味	(A) 単数・不定	(b) 単数・定	(c) 複数・不定	(d) 複数・定
単数の形式が無標	‘large basket’	kulún- \emptyset - \emptyset	kùluŋ- \emptyset -út	kùluŋ-ùn- \emptyset	kùluŋ-uun-àk
	‘rain’	ròp- \emptyset - \emptyset	ròp- \emptyset -ta	ròp-kwòòn- \emptyset	ròp-kwoon-ìk
	‘hole’	mwèn- \emptyset - \emptyset	mwèn- \emptyset -ét	mwèn-oos- \emptyset	mwèn-oošy-èk
	‘song, music’	tuum- \emptyset - \emptyset	tùm- \emptyset -to	tùmm-wòn- \emptyset	tùmm-wòòn-ìk
複数の形式が無標	‘rat’	mùr-ya- \emptyset	mùr-yàa-ntet	mùr- \emptyset - \emptyset	mùr- \emptyset -ek
	‘egg’	màkèy- \emptyset - \emptyset	màkey-oo-ntèt	màkey- \emptyset - \emptyset	màkèy- \emptyset -ik
	‘young woman’	kòòkòòn-po- \emptyset	kòòkòòn-pò-ntet	kookòòn- \emptyset - \emptyset	kòòkòòn- \emptyset -uk
	‘thief’	çoor-ín- \emptyset	çoor-ín-tét	çoor- \emptyset - \emptyset	çòòr- \emptyset -ik
単数の形式と複数の形式のどちらが無標かを決めるのが困難	‘tree’	keet- \emptyset - \emptyset	keet- \emptyset -ít	kèèt- \emptyset - \emptyset	kèèt- \emptyset -ik
	‘mango’	mùyèm-çó- \emptyset	mùyèm-çòò-ntet	mùyèm-peen- \emptyset	mùyèm-pèen-ik
	‘Irish potato’	pryaàs-a- \emptyset	pryaàs-àa-ntet	pryaas-iin- \emptyset	pryaàs-iin-àk
	‘fish’	pùrpùr-yo- \emptyset	pùrpùr-yòò-ntet	pùrpùr-un- \emptyset	pùrpùr-ùun-àk
分析が困難	‘cow, cattle’	tań	tèèta	toč	tòòka
	‘girl, daughter’	tyé	çèpto	tiipín	tiipik

表1の最後の例のように、(C)不定・複数と(D)定・複数のそれぞれの形式が融合して $-(V)n$ と $-(V)k$ で対立しているように見える例がある (e.g. ‘thing’ (C) *tuk-ún*, (D) *tuk-úk*; ‘dog’ (C) *ɲòk-ín*, (D) *ɲòk-ík*; ‘heifer’ (C) *yíywook-ín*, (D) *yíywook-ík*)。また常に単数が複数で使われる名詞もある (常に単数: e.g. ‘nighttime’ (A) *kòòmoy-ø*, (B) *kòòmooow-úút*, 常に複数: e.g. ‘money’ (C) *kar-ín*, (D) *kar-ík*)。また、単数形しかない名詞 (e.g. ‘God’, ‘nighttime’) や複数形しかない名詞 (e.g. ‘milk’, ‘water’) がある。親族名称を表す名詞のほとんどは定の単数の形式しかない。

4. クプサビニ語の名詞の定と不定の形式の使用領域

本研究では、自然な会話、民話、実話、Tom Güldemann & Ines Fielder の Focus elicitation tools を使った会話の翻訳、Wallace Chafe の Pear Film の内容の記憶に基づく語りのデータ、コンサルタントが作成した会話例等において、どのような文脈でどの名詞の形式が使われるかを調べ、さらにコンサルタントから個々の文脈においても一方の定性の形式を使うことができるか、使える場合はどちらがより普通の表現であるか、意味の違いは何かに関する情報を得た。これらがどのように使われるかを主に会話のデータの例を使って示す。

4.1 クプサビニ語の名詞の定と不定の形式の Dryer (2014) の Reference Hierarchy における使用領域

大雑把に言って、クプサビニ語の名詞の定と不定の形式は表2に示したような使用の分布を示す。(以下で、#は不適切であることを、“A > B”はAがBよりも好んで使われることを、“A or B”はAもBも使われどちらが好んで使われるかは事象の種類によることを表す。) どちらの形式が好んで使われるかということ考慮に入れなければ、定の形式は (i)–(iv) または (i)–(v)、不定の形式は (iii)–(v) に使われるので、どちらも階層において連続していて、Dryer (2014) の仮説を支持していると言える。

表2: Dryer (2014) の Reference Hierarchy におけるクプサビニ語の名詞の定と不定の形式の使用領域

名詞句のタイプ	定と不定の形式の使用
(i) Anaphoric definites	定、#不定
(ii) Nonanaphoric definites	定、#不定
(iii) (Semantically and) pragmatically specific indefinites	不定 > 定 (均質な成員から成る範疇: 定 or 不定)
(iv) Pragmatically nonspecific but semantically specific indefinites	不定 > 定 (均質な成員から成る範疇: 定 or 不定)
(v) Semantically (and pragmatically) nonspecific indefinites	否定: 不定、#定 (まれに不定 > 定)、 否定以外では、ほとんどの名詞で定 > 不定 (いくつかの名詞で不定 > 定)

まず、Dryer (2014) の Reference Hierarchy において定の領域の名詞句 ((i) Anaphoric definites と (ii) Nonanaphoric definites) には定の形式しか使えない。

(i) **Anaphoric definites**: 一度述べられた指示対象に対しては定の形式しか使えない。例えば、(3) の話し手はこの発言の直前に彼女の母親が男の子を二人産んだことについて話していて、ここで *wéér-i-k* の代わりに不定の形式 *wèèr-ø-ø* (あるいは *weer-ín*) を使うのは不適切である。

- (3) ... yóoto kaa-čéé-yi wéér-i-k ñpo kapá-acék.
that.time T.PST.3-IMPRS-produce boy-PL-DEF EMPH home.SG.DEF-1PL.POSS
‘... at that time, when the boys were produced in our home.’ (Conversation 2016.8-6: 003C_160819_1209)

(ii) **Nonanaphoric definites**: 談話での前方照応が起らず話し手と聞き手の共有知識に基づく定に関しては、通常定の形式が使われる。例えば (4) は、隣の部族が過去にセベイ地区の最東のケニア国境の町 Bukwo に攻めて来た時の話の最初の部分で、家々と人々は Bukwo の家々と人々であることは明らかなので、このように定の形式を使うのが普通である。(ただし、(iii) や (iv) として扱って不定の形式 *koorín* と *píč* を使うことも可能。) (5) は祭り事で泥酔した人がどのような行動を示すかについて話していて、服はこの会話で初めて現れたが、服はこの文脈で泥酔した人の服でなければならないので、定の形式を使わなければならない。不定の形式 *sír-òy-ø* を使うのは不適切である。

- (4) ... ku-péél kooriik-i àn = ku-pakáč píiko.
PTCP.3-burn house.PL.DEF-EMPH and=PTCP.3-kill person.PL.DEF
‘... and they burned houses and killed people.’ (Story 2015.7/8-1: 005A_150728_2240)

- (5) ø-pür-e ɲún, kù-pa sur-ò-k lín.
PRS.3-fall-IPFV down PTCP.3-go.PL clothes-PL-DEF there
‘They (drunkards) fall down, and the clothes (that they wore) go that way.’ (Conversation 2018.1-6: 1004A_180109_1637)

ところが他の三つのタイプ不定の名詞句 ((iii), (iv), (v)) に関しては、定の形式と不定の形式のどちらかを使用しなければならないというわけではなく、ほとんどの場合にどちらの形式も使うことが可能で、一方がより良いとみなされることが多い。(iii) Pragmatically specific indefinites と (iv) Semantically nonspecific but semantically specific indefinites では、指示対象が人間が家畜の場合はたいがい、不定の形式の方が定の形式よりも良いと考えられる。不定の領域に定の形式が好んで使われるのは、名詞句の指示対象が均質な成員から成る範疇を形成しているとみなされ、話者がその範疇の成員の共通の特徴を理解している場合である。これは主に名詞句の指示対象が無生あるいは家畜以外の動物である場合である。(一方、範疇が様々な個性を持つ成員から成る人間や家畜の場合は、(iii) と (iv) には不定の形式が通常使われる。)

(iii) (Semantically and) pragmatically specific indefinites : 談話で後に指示される意味的・語用的に特定の不定の名詞句は、指示対象が有生である場合は定の形式よりも不定の形式が、指示対象が無生である場合は多くの場合不定の形式よりも定の形式が好んで使われる (ただし事象の種類にもよる : 4.2.2)。例えば、(6) で牛はこの文脈で初めて現れ、この後すぐにまた言及されるが、不定の形式は定の形式 *tòðka* (西部、中央部) / *tùùka* (東部) よりも好まれる。それに対し、(7) は物語の正に最初でボトルとバッグは初めて述べられ、この後引き続き述べられるが、定の形式が不定の形式 *cuup-aan-ø* と *cikap-uun-ø* よりも好まれる。同様に、(8) で銃はこの文脈で初めて現れ、この後にまた言及されるが、定の形式は不定の形式 *mòòtin* よりも好まれる。(8) の最後の *mòòtin* については (v) で述べる。)

- (6) ara nòó jín jee ø-míite ku-çoo-n-í kaŋ-úú
I.wonder who that REL.SG PRS.3-exist PTCP.3-come-hither-IPFV home.SG.DEF-1SG.POSS
ák tóč čee ø-míí kú-kwoor-ú?
with cow.PL.INDEF REL.PL PRS.3-exist PTCP.3-take/bring-hither
'I wonder, who is that one who is coming to my home with cows that s/he is bringing?' (Story 2015.7/8-6 *čeerwoŋ akóó mèliil* 'Hare and leopard': 012A_150803_2256)
- (7) ... kù-nam-oo-t-i čuup-aan-ik akóó cikap-uun-øk ...
PTCP.3-carry-along-thither-IPFV bottle-PL-DEF and bag-PL-DEF
'... carrying bottles and bags as they went along ...' (Story 2015.7/8-2 *miyaat jakoornatet* 'Fear is bad')
- (8) ... kì-poont-ð piì-ču moolík ...
D.PST.3-have-3 people.NOM-these gun.PL.DEF
n̄teené ačék sàpinčák ku = čé kì-ma-če-póont-e moolín.
but 1PL.NOM Sapiny.NOM COP=REL.PL D.PST.3-NEG-1PL-have-1/2 gun.PL.INDEF
'(It turned out that these people were very tough,) these people had guns, (and they had all the things that were enough to defeat us,) but we the Sebei were the ones who did not have guns.' (Story 2015.7/8-1: 005A_150728_2240)

(iv) Semantically specific but pragmatically nonspecific indefinites : この言語において、談話で後に指示されるかどうかは名詞の定・不定の形式の選択に影響を与えず、意味的に特定のだけが語用的に不特定の不定の名詞句は意味的・語用的に特定の不定の名詞句と同じように振る舞う。例えば、(6) で牛がその後に言及されなかったとしても不定の形式は定の形式よりも好まれる。他方、(9) で無生のナイフはこの場面で初めて現れ、ナイフについてはこの後述べられていないのだが、定の形式は不定の形式 *rottw-à-ø* よりも好まれる。

- (9) muna[-ku]-pakač-á čii-či, n̄teené kii-póont-o róótw-e-t
NEG[-PTCP.3]-kill-1SG person.SG.DEF.NOM-this but D.PST.3-have-3 knife-SG-DEF
čii-či jee kii-mač-é kulè à-paréén-a àni.
person.SG.DEF.NOM-this REL.SG D.PST.3-want-IPFV CMPL PTCP.1SG-stab-1SG 1SG.NOM
'... this person did not kill me, but this person had a knife with which he wanted to stab me' (Story 2015.7/8-1: 005A_150728_2240) (語り手は *muna-pakač-á* と言ったが、正しくは *muna[-ku]-pakač-á*)

(v) (Semantically (and) pragmatically nonspecific) indefinites : 否定で「全く何も...ない」というように名詞句が特定の指示対象を指さない場合 (例 : (8) *moolín*) は、有生であれ無生であれ通常不定の形式が使われ、定の形式は使われない。否定以外では、話し手が名詞句が指す範疇を理解していれば定の形式の方が、理解していない場合は不定の形式の方がより良いとみなされるようである。(10a) (または (10) の一行目で発話が終わっている場合) でモンスターは実際に存在しないにしろ話者がそれがどのようなものであるかを知ってさえすれば定の形式は不定の形式よりも好まれる。ところが、(10b) のように話者がモンスターというものがどのようなものであるか知らない場合には不定の形式が定の形式よりも好まれる。(‘S/he is looking for a monster, even though s/he does not know what it is.’ の場合、定の形式が好まれる。) これは、*nàkkaroontyo* (INDEF)/*nàkkaroonto* (DEF) ‘Buggisu monster’ (Buggisu: セベイの西側にいるバントウのギス族) および *ày-yo-ø* (INDEF)/*ày-yòò-ntet* (DEF) ‘ghost’ のような他の架空の生物にも同じように当てはまる。(11) では女性が探している将来の夫のタイプは均質な範疇を形成しているので、通常定の形式が使われるということである。これはこの動詞の目的語が人間 (例 : ‘employee’, ‘lawyer’) であろうが、動物 (例 : ‘cow’) であろうが、無生 (例 : ‘house’, ‘land’, ‘car’, ‘clothes’, ‘hotel’, ‘love’; 実際 (7) の直前は ‘they went to look for honey there in the forest’ で ‘honey’ に定の形式が使われていて、不定の形式よりも良いという) であろうが、普通は定の形式が使われるようである。(しかし ‘X is looking for Y’ の Y が ‘plate’, ‘stick’, ‘paper’, ‘bird’ 等の場合は、不定の形式が使われるようで、もっとデータを取って調べる必要がある。)

- (10) ø-miite neetó ku-čèèj-è kààpòmč-i-t/kààpòmč-i-ø,
PRS.3-exist 3SG.NOM PTCP.3-look.for-IPFV monster-SG-DEF/monster-SG-INDEF
n̄kal kot { (a) à-nkít kulè, mà-ø-miitè.
although EMPH PRS.1SG-know CMPL NEG-PRS.3-exist
(b) ma-a-nkít àni kulè, kiy né.
NEG-PRS.1SG-know 1SG.NOM CMPL thing.INDEF.SG what }
'S/he is looking for a monster, (a) even though I know they do not exist/(b) even though I do not know what it is.' (elicited)
- (11) ø-miite koork-è-t kù-čèèj-è sààntet/sààna.
PRS.3-exist woman-SG-DEF PTCP.3-look.for-IPFV husband.SG.DEF/husband.SG.INDEF
'The woman is looking for a husband.' (elicited)

4.2 クプサビニ語の名詞の定と不定の形式の使用の詳細 4.1 に述べたのは、クプサビニ語の名詞の定と不定の形式の大きな用法であり、実際にはもっと複雑である。まだわからない点があるが、以下に現時点でわかっていることを述べる。

4.2.1 名詞句の指示対象の種類による違い 4.1 で主に名詞句の指示対象が有生か無生か（人間・家畜 vs. その他）による定性の標識の違いについて述べた。‘There is/was X on the road’, ‘S/he/I saw X on the road’, ‘S/he/I need(s) X’などで、指示対象が人間や家畜の場合、（X がその後と言及されるかどうかにかかわらず）不定の形式が (iii) と (iv) に使われる。指示対象が無生あるいは家畜以外の生物である場合は定の形式も不定の形式も使われるが、このような文脈でも定の形式が好まれる名詞がある（例：‘water’, ‘plate’, ‘stick’, ‘pencil’, ‘mosquito’）。また、指示対象が人間かどうかが基準になることがある。‘What is that?’ という質問の答えとして、人間である場合には不定の形式が定の形式よりも好まれ（‘What does s/he do?’ や ‘What kind of person is s/he?’ の質問の答えも）、人間以外の場合は定の形式が不定の形式よりも好まれる。

4.2.2 事象の種類による違い 無生の名詞句はすべての場合に同じように振る舞うわけではなく、事象の種類により定の形式と不定の形式の使用が大きく変わってくる名詞とそうでない名詞がある。例えば、‘tree’は ‘saw/climbed/planted a tree’ のような事象には不定の形式の方が定の形式よりも使われるが、‘cut/kicked/touched/knocked down a tree’, ‘removed the bark of a tree’, ‘a tree fell down’ のような事象には不定の指示対象にも定の形式の方が不定の形式よりも使われる。以下の (12) は会話のまさに最初に起こり、聞き手は指示対象の服を知らないのだが、ここでは定の *sur-ò-k* が使われ、不定の *súr-oy-ø* は使われない。

(12) ki-ŋét pešš-éé-t=ake yèè caa-míite à-siit-e sur-ò-k lè, ...
D.PST.3-happen day-SG-DEF=certain.SG when R.PST.1SG-exit PTCP.1SG-wash-IPFV clothes-PL-DEF DM
‘It happened at a certain time when I was washing clothes, ...’ (Conversation 2018.1-2: 005A_180106_1640)

一方、事象の種類にかかわらずほとんどの場合に定の形式の方が不定の形式よりも使われる名詞がある（例：‘milk’, ‘book’）。コンサルタントによると、このように定の形式が使われる事象においては（会話の参加者の知識としてはなくても）指示対象を特定することができるので定の形式が使われるということであるが、この点についてはもっと調査が必要である。

4.2.3 その他 以下では、名詞句の指示対象の種類や事象の種類では説明できないようなクプサビニ語の名詞の定と不定の形式の用法を記述する。

[1] 定の形式を日常頻繁に使い、多くの名詞の不定の形式を尋ねられても答えられない若者がいる。メインのコンサルタント（現在の時点で 49 歳の聖書翻訳者）でさえも不定の形式（とりわけ複数形）について尋ねた時にその形式を言うまでに時間がかかるということがあった。

[2] Pear Film の内容の語りにおいて、不定の文脈で（ビデオに初めて現れた時に）使われた 15 の指示対象を表す語の形式を調べたところ、93.8 パーセントが定の形式だった。常に定の形式しか使わない話者が（特に若者に多く）いた。ただ、参加者は「このビデオを見たことがない人にビデオで起こった内容を話してください」という指示にもかかわらず、指示対象をすでに既知のものとして語ったということもあり得る。

[3] 被所有名詞は定の形式しか使われない。（ただし、位置名詞を除く。）

[4] 指示接尾辞と所有人称接尾辞は定の形式に付く。

[5] クリティック =*akè*/=*álak* ‘(a) certain’ が伴う時は、意味的には不定だが、定の形式が使われる。

[6] ほとんどの位置名詞は単数形のみ持ち、不定の形式のみを持つもの（e.g. *táy* ‘front’）、定の形式のみを持つもの（例 *àrit* ‘inside’）、両方の形式を持つもの（e.g. *ŋúp* (INDEF)/*ŋùŋnit* (DEF) ‘ground’）がある。

[7] 不定の形式が軽蔑的な (pejorative) 形式として使われることがある。(13) では肉がすぐ前に述べられていて定の形式も使えるが、「単なる肉」という意味合いを持たせるために、不定の形式が使われている。

(13) ... ø-muučè kù-sut-ùŋ m̀po kiilò jee pò p̄en ...
PRS.3-can PTCP.3-bring-2SG EMPH kilogram REL.SG belong meat.SG.INDEF
‘... he might have brought 1 kilogram of meat to you ...’ (Conversation 2018.1-4: 006A_180108_1656)

[8] 総称的な名詞句には、指示対象の有生性にかかわらず、不定の形式が定の形式よりも好まれる。X does Y の X が総称的な名詞句である場合の X、X is Y の X が定で Y が総称的な名詞句である場合の Y、さらには X is Y の X も Y も総称的な名詞句で X *ku*=Y (*ku*= はコンピュータ) という構文で表される場合の両方の名詞句がこれに当てはまる。（X is Y の X も Y も総称的な名詞句で Y X という構文で表される場合は X に定の形式、Y に不定の形式が好まれるようである。）

[9] 名詞句で人を呼ぶ場合は不定の形式が使われる（e.g. *čòòrwà* ‘Friend!’, *kààneetìn* ‘Teacher!’）。（ただし、*poontét* ‘old man’ と *česšét* ‘middle-aged woman’ には定の形式が使われる。）

[10] 疑問詞の *ne* ‘what’ は不定の形式の名詞のみを修飾し（e.g. (10b)）、*àta* ‘how many’ は定の形式よりも不定の形式の名詞を修飾するのがより普通である。

[11] 民話を語る時に話し手も聞き手も指示対象を知らないということを示すのに、不定の形式が一貫して使われることがある。

[12] いくつかの語彙にその特異性が見られる。例えば ‘money’ (SWH) を表す 4 つの形式はどれほどの文脈においても同じように使える。少数の名詞は、意味により定の形式と不定の形式の使い分けが見られる。例え

ば ‘Church’ を表す語（ガンダ語起源: *kùsàpa* (INDEF)/*kùsàpet* (DEF); スワヒリ語起源: *kànisa* (INDEF)/*kàniset* (DEF)) は、「教会に行く」という場合は不定の形式のみが使われ、組織としての教会には定の形式よりも不定の形式が好まれ、教会の建物には不定の形式よりも定の形式が好まれる。

5. クプサビニ語のデータから言えること

クプサビニ語の名詞の定と不定の形式はそれぞれ Reference Hierarchy における連続したタイプの名詞句に使われるので、Dryer (2014) の仮説を支持していると思われる。階層の上部二つのタイプの定には定の形式を使わなければならない。ただ、クプサビニ語の名詞は名詞句が表す範疇の性質、とりわけ指示対象の種類による違い（特に、指示対象の有生性）等、名詞句のタイプにより定と不定の形式のどちらがより良いと見なされるかが変わってくる。さらには、事象の種類を始めた様々な特異性が見られる。

Dryer (2014) 自身指摘しているように、文法書からは、個々の冠詞の使用が義務的であるかどうか、ある冠詞が使われている時に別の冠詞も使えるかどうかはわからないことが多い。クプサビニ語に見られるような、名詞句の指示対象の種類による違い等の複雑な現象については、文法書に記述してあることは多くない。文法書にテキストが記録してあっても、それが最も好まれる形式の使用を反映しているかどうかは、それについての記述がない限り明らかにはならない。実際クプサビニ語の会話のデータでも、不定の形式が使われるのがより普通であるような文脈に定の形式が使われていたり、定の形式が使われるのがより普通であるような文脈に不定の形式が使われていたりする事例がいくつかある。例えば、(14) で指示対象の存在を含まない意味的・語用的に不特定の不定に定の形式 *lèkk-wee-t-i* が使われているが、コンサルタントによると、ここでは不定の形式 *lèkk-wa-ø-á* (child-SG-INDEF-Q) を使用した方がより良い。

(14) ... mà-ø-yiy ne *lèkk-wee-t-i*?
 NEG.3-PRS.3SG-produce 3SG.NOM child-SG-DEF-Q
 ‘... can’t he produce a child?’ (Conversation 2018.1-7: 005A_180109_1656.MP3)

したがって、ある形式がどのように使用されるかをテキストのデータで調べることはもちろん重要であるが、さらにそれが義務的であるか、他の形式を使うことは可能かどうかということを確認することも、その形式の使用を正確に知るためには重要である。Reference Hierarchy は、定冠詞・不定冠詞のある言語の世界における分布を調べた結果（もともとは冠詞と名詞の順序の研究: Dryer 1989）提案された。この階層における冠詞の適用範囲の類型論の研究のためには、テキストのデータだけでなく、さらに厳密な用法の調査が必要であるように思われる。

略号一覧 CMPL: complementizer, COP: copula, DEF: definite, DM: discourse marker, D.PST: distant past, EMPH: emphatic, IMPRS: impersonal, INDEF: indefinite, IPFV: imperfective, NEG: negative, NOM: nominative, PL: plural, PTCP: participle（用法が多く、他の言語での consecutive に相当する用法もある）、Q: question, REL: relative clause marker, SG: singular, SWH: Swahili, TPN: TNS/PRS.NUM (tense/person.number prefix), T.PST: today past, V: verb

謝辞 クプサビニ語母語話者の調査協力者（特にメインのコンサルタントの Chebet Francis 氏、Chebet Mercy 氏）に感謝を申し上げます。本研究は科学研究費補助金基盤研究 (B) 研究課題番号 15H05157（研究代表者：河内一博）により可能になりました。Wallace Chafe の Pear Film のビデオ・ファイルは Mary Erbaugh 氏によるものです。

参考文献

- Creider, Chet A., and Jane Tapsubei Creider. 1989. *A grammar of Nandi*. Hamburg: Helmut Buske Verlag.
- Dryer, Matthew S. 2005a. Definite articles. In Haspelmath, Martin, Matthew S. Dryer, David Gil, and Bernard Comrie (eds.) *The world atlas of language structures*, 154–57. Oxford: Oxford University Press.
- Dryer, Matthew S. 1989. Article–Noun order. *Papers from the 25th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 83–97.
- Dryer, Matthew S. 2005b. Indefinite articles. In Haspelmath, Martin, Matthew S. Dryer, David Gil, and Bernard Comrie (eds.) *The world atlas of language structures*, 158–61. Oxford: Oxford University Press.
- Dryer, Matthew S. 2013a. Definite articles. In Dryer, Matthew S., and Martin Haspelmath (eds.) *The world atlas of language structures online*, Chapter 37. Online: <http://wals.info/chapter/37>. Munich: Max Planck Digital Library.
- Dryer, Matthew S. 2013b. Indefinite articles. In Dryer, Matthew S., and Martin Haspelmath (eds.) *The world atlas of language structures online*, Chapter 38. Online: <http://wals.info/chapter/38>. Munich: Max Planck Digital Library.
- Dryer, Matthew S. 2014. Competing methods for uncovering linguistic diversity: The case of definite and indefinite articles (Commentary on Davis, Gillon, and Matthewson). *Language*, 90.4, e232–e249. https://www.linguisticsociety.org/sites/default/files/05e_90.4Dryer.pdf
- Dryer, Matthew S., and Martin Haspelmath (eds.) 2013. *The world atlas of language structures online*. Munich: Max Planck Digital Library. Online: <http://wals.info/>.
- Dixon, R. M. W. 1994. *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Givón, Talmy. 1978. Definiteness and referentiality. In Greenberg, Joseph (ed.) *Universals of human language*, 291–330. Cambridge, MA: MIT Press.
- Haspelmath, Martin, Matthew S. Dryer, David Gil, and Bernard Comrie (eds.) 2005. *The world atlas of language structures*. Oxford: Oxford University Press.
- Hieda, Osamu. 2006. On singulatives in Nilotic languages. *Nilo-Ethiopian Studies*, 10, 1–14.
- 稗田乃 2006. 『ナイル諸語比較研究の諸問題：ナイル語西方言における名詞の語形成法を中心に』（アジア・アフリカ言語文化叢書 45）東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 <http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/67869>
- König, Christa. 2006. Marked nominative in Africa. *Studies in Language*, 30.4. 655–732.
- König, Christa. 2008. *Case in Africa*. Oxford: Oxford University Press.
- König, Christa, Bernd Heine, and Karsten Legère. 2015. *The Akie Language of Tanzania: A sketch of Discourse Grammar*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies. <http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/86105>
- Montgomery, Christine Anne. 1966. The morphology of Sebei. Ph.D. dissertation, University of California, Los Angeles.
- O’Brien, Richard J., and Wim A. M. Cuyers. 1975. A descriptive sketch of the grammar of Sebei. *Georgetown University Working Papers on Languages and Linguistics*, 9, 1–108. Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- Toweett, Taaita. 1979. *A study of Kalenjin linguistics*. Nairobi: Kenya Literature Bureau.
- Tucker, Archibald Norman, and Margaret Arminel Bryan. 1966. (eds.) *Linguistic analysis: The Non-Bantu languages of North-Eastern Africa*. Oxford: Oxford University Press.
- Zwartz, Joost. 2003. *The phonology of Endo: A Southern Nilotic language of Kenya*. Utrecht, Netherlands: Utrecht Institute of Linguistics. www.let.uu.nl/uilots/research/.../Zwartz_Endo_phonology.pdf